

# オンライン多読システムを利用した授業の構成とアクティビティ\*

井村 誠\*\*

知的財産学部 知的財産学科

(2020年12月8日受理)

## Course Design Using an Online Extensive Reading System

—In-class Activities for Enhancing Motivation—

by

Makoto IMURA

Department of Intellectual Property

Faculty of Intellectual Property

### Abstract

Extensive reading has been attracting wide attention among English educators as a way of supplying students with ample input and actively engaging them in an authentic use of language. Fortunately, recent developments in online extensive reading systems have allowed teachers to provide extensive reading lessons without having to carry a heavy load of books for each lesson. Additionally, those systems enable students to select books according to their proficiency levels and facilitate teachers to keep track of the students' reading records. This is a practical report of a new English course using an online extensive reading system in the Department of Intellectual Property. Though the class had to be conducted online due to the COVID-19 pandemic, it went seamlessly. The students were required to read at least 50,000 words during the semester (14 weeks), which 29 out of the 35 participants (83%) accomplished. The questionnaire result also suggests the activities to enhance extensive reading were fun and motivating.

キーワード ; 多読, オンライン多読システム, Xreading, 理解可能なインプット, モチベーション

**Keyword ;** Extensive Reading, Online Extensive Reading System, Xreading, Comprehensive Input, Motivation

---

\* 2020年度 JACET 関西支部大会で発表(2020年11月14日~30日, オンライン配信)

\*\* 大阪工業大学知的財産学部

## 1. はじめに

本稿は、2020年度に開講したオンライン多読システムを利用した授業（知的財産学部2年次以上対象英語選択科目）の実践報告である。日本人英語学習者のインプット量不足が問題視される中、多読（Extensive Reading）の重要性が指摘され、英語教育に多読をとり入れる動きが広がりを見せている。リただ、これまで多読の授業を行うためには、まず多くの図書を購入し、毎回の授業へ図書を運搬しなければならないことのほか、図書の整理・分類や読書記録の管理など、たとえ図書館の協力を得られたとしても教員にかかる負担が重く、多読教育普及の足かせとなっていた。ところが昨今のオンライン多読システムの開発にともなってこのような問題は殆ど解消し、多読を授業に容易に取り入れることができるようになった。折しもコロナ禍によって英語科目の授業もオンラインで行うことを余儀なくされたが、とくに支障はなく、むしろオンライン授業にうまく適合し、当初心配されたインタラクティブ性（学生との双方向のやり取り）も担保することができた。

本稿では以下にまず多読の重要性について述べ、次にオンライン多読システムの仕様を説明した上で、授業実践を紹介する。多読はあくまでも学習者個人が行う活動であるため、授業内活動では学習者のモチベーションを高め、授業外学修につなげることが重要となる。ではどのような活動が考えられるのか、また教師の役割をどう考えればよいのか、これらの点について学生のアンケート結果を踏まえて考察する。

## 2. 多読の重要性

### 2.1 インプット量の不足

日本の学生が中高の英語教科書で読む英文の量は3万語～3万5千語程度である。<sup>2)</sup> これはペーパーバック100頁分にも満たない量であり（因みに『ハリー・ポッターと賢者の石』<sup>3)</sup> は約7万7千語、223頁）、しかも教科書のリーディングは辞書を引きながらの「学習」であって、一般的な意味での「読書」ではない。つまり英語を実際のコミュニケーションの中で使っているとはいえない。このような実情のもとで「実践的なコミュニケーション能力」の育成など望むべくもなく、絶対的に不足しているインプットを補うために多読の必要性が叫ばれるよう

になった。多読教育を推進する母体として2001年にはSSS英語学習法研究会（現SSS英語多読研究会）が、2004年には日本多読学会が設立され、現在に至っている。

### 2.2 インプット仮説と多読教育のアプローチ

第2言語習得の観点からいえば、多読教育が拠り所とする理論はKrashenのインプット仮説である。この考え方によれば、人が言語を習得する唯一の方法はメッセージの意味を理解することであり、言い換えれば「理解可能なインプット」を受け取ることである。<sup>4)</sup> 多読教育のアプローチは、辞書を引かなくても理解できるレベルの本を楽しみながら数多く読むことで、同じ単語や定型的な表現、構文に繰り返し触れることによって自然に英語の力を身につけることを目指している。無意識の偶発的な学び（incidental learning）を重視する考え方である。したがって、多読を行うにあたっては、まず本人が楽しめる図書を自分で選択すること（self-selected reading）が要件となる。その上で、SSS英語学習法研究会や日本多読学会では次の多読3原則とよばれるものを推奨している。

- ① 英語は英語のまま理解する
- ② 7～9割の理解度で読む
- ③ つまらなければあとまわし

また多読の目的はできるだけ多くの本を楽しみながら読むことなので、内容が理解できたかどうかの簡単なチェックは避けられないとしても、学習項目を細かくテストで評価することは読書意欲を削ぐことになりかねない点に注意する必要がある。

## 3. オンライン多読システム

### 3.1 デジタル図書

青空文庫や<sup>5)</sup> プロジェクトグーテンベルグ<sup>6)</sup>あるいはアマゾン社が提供するkindleサービスなどを使って、今ではインターネットを介してデジタル化された図書をパソコンやタブレット端末、スマートフォンなどを使って容易に読むことができるようになった。英語の多読教育用にも種々の便利なサイトが公開されている。例えば無料のものとしてOxford OWL<sup>7)</sup>やExtensive Reading Central<sup>8)</sup>が挙げられる。前者はオックスフォード大学出版局が運営するサイトで、同社が刊行している児童向けの図書が音声付きで読めるほか、映像を含む様々な教育リソースが提供されている。後者はノートルダム清

心女子大学の Rob Waring 教授と明治学院大学の Charles Browne 教授を中心に開発されたサイトで、こちらは図書のほか、様々な分野について書かれたフリーテキストや映像音声を提供されている。有料のシステムとしては、Oxford Reading Club<sup>9)</sup> (オックスフォード大学出版局)、eSTATION 多読の森<sup>10)</sup> (コスモピア)、Literacy Pro Library<sup>11)</sup> (Scholastic) など出版社ベースのサービスが競合している。有料システムは授業利用にかんがみて学習履歴の管理などの機能が充実していることが特徴である。本稿では実際に授業で用いた X-Reading<sup>12)</sup> というシステムについて以下に概説する。

### 3.2 Xreading

Xreading はオンライン多読システムの開発に特化した企業 (Xreading 社) によって提供されているものである。収録図書は本原稿執筆時点で約 1,200 冊で、外国語学習者のために語彙の難易度を調整した Graded Reader と呼ばれる図書が中心であるが、最近では Leveled Reader と呼ばれる英語を母語とする児童向けの図書も導入しており、収録図書は今後も拡大していくと思われる。費用は個人利用の場合 1 ヶ月 600 円であるが、学校単位で申し込む場合は割引があり、授業期間に合わせて調整が可能である。学生は教科書の代わりに購読用のカードを購入し、そこに記入されているコードを入力することによってシステムの利用を開始することができる。当該授業は半期 (14 週) であったが、学生は授業後も含めて 6 ヶ月間システムを利用することができた。Xreading の特徴として以下のような機能がある。

#### (1) プレイメントテスト

Xreading を使って多読を開始する前に、学習者はまず自分の現在の読解力を測るためのプレイメントテストをシステム上で受けることができる。所要時間は 10 分程度で、リーディングレベルは 14 段階あり、学生は各自のリーディングレベルに応じて図書を選択することによって、無理なく多読を続けることができる。また一定の分量の読書をすることで、その後のリーディングレベルが段階的に上がっていくように設計されている。

#### (2) 図書検索機能

学習者は出版社 (現在 23 社)、レベル (14 段階)、ジャンル (33 種類) などから条件を絞り込んで、好みに合った本を選択することができる。候補となる図書の表示画面には、本の表紙 (ジャケット) の写真のほか、詳細な書誌情報 (タイトル・著者・レ

ベル・ジャンル・総語数・対象年齢・英語の種類など) と内容の要約 (英文) が示される。さらに情報が見たい場合はボタンをクリックすると、他の読者が読んだ感想や評価なども見ることができる。

#### (3) クラス課題設定機能

コースを開講するにあたって教師はまずクラス課題というものを設定しなければならない。設定する項目は、目標、開講期間、制限事項などである。制限事項では、理解確認クイズの合格基準や、リーディングスピードの上限などを設定することで、理解不十分な場合や、不当に早く終了した場合は、語数が学習記録に加えられないようにすることができる。

#### (4) 学習履歴管理機能

学習者は各自の読書記録および、次のレベルに上がるまでに必要な読書量 (語数) を確認できる。教師側では学習者ごとのリーディングレベル、読書冊数、読んだ語数、読んだ本の Reading Level の平均、リーディングスピードの平均、リスニング時間、理解度確認クイズの受験回数、合格回数、平均点などを確認することができる。さらに詳しく各自のそれぞれの本の読書履歴を見することもできる。

#### (5) ブック・レビュー機能

学習者は読書終了後、理解度確認クイズを受けた後、満足度や難易度の評価を記入し、さらに簡単な感想を記入することができる。この結果は書誌情報に反映されるので、(2) に記したように、他の読者がどのような評価やレビューをしているかを見ることによって、モチベーションの向上につながるることができる。

## 4. 授業実践

### 4.1 対象

授業は今年度 (2020 年) より開講した、知的財産学部の 2 年生以上を対象とする半期選択科目「メディア英語 III」で、前期の授業期間は 5 月 11 日から 8 月 17 日まで (多読対象期間は 8 月 31 日まで)、履修者は 35 名 (2 年生 27 名 / 3 年生 4 名 / 4 年生 4 名) である。履修者の英語能力は多様で、TOEIC レベルは 130 点 ~ 500 点であった。

### 4.2 授業環境

講義連絡には大学のポータルサイトの掲示版に連動した学生への一斉メールを、授業配信には Google Meet を、教材配布や課題提出には Learning

Management System の Moodle を使用してオンライン授業環境を整えた。

### 4.3 目標設定と授業方針

多読教育の究極の目標は、自律した学習者（読者）を育成することにあるが、そのためにはまず簡単なものから始めて、できるだけ多くの本を読む中で自信をつけ、楽しみを見つけ、自らどんどん読み進めていく習慣を身につけるように導かなければならない。そこで本コースでは、半期約4カ月の間に授業外の時間を使って5万語以上読むことを目標とし、授業内では楽しみながら無理なく読み進めて行けるように、学習者のモチベーションを向上させる活動を中心に行うことを方針とした。なお、とばし読みやすべり読みを回避するために理解度確認クイズの合格基準は60%（5問中3問正解）、リーディングスピードの上限は毎分500語以下に設定した。

### 4.4 授業内活動

授業内での活動は Day & Bamford (2014)<sup>13)</sup> に記載されている活動例などを参照して策定し、毎回の授業の構成は、およそ次の(1)～(5)の流れで行った。

#### (1) 授業内多読

授業開始後10分程度時間をとって授業内多読を行った。小・中学校で行われている朝の読書運動のようなものである。授業時間中に多読を行うことの重要性および有効性についてはこれまでも指摘されており、<sup>14)</sup> 少しでも読書量を増やすことができるほか、集中力を高め、多読への意識づけ、習慣づけにつながると考えられる。また10分あれば500語から1,000語程度読むことができるので、少しずつでも毎日読めば無理なく目標を達成できることを実感させることができる。開始の前には毎回多読3原則の確認を行った。学習者が読書している様子をモニターすることはしなかったが、アンケートの反応から、総じて真剣に取り組んだことが見て取れる。

#### (2) 多読ガイダンス

多読ガイダンスのコーナーでは、毎回多読を進めていくうえで役立つ情報を提供することに努めた。以下が主なトピックである。

- 英語を勉強することと英語を使って読むことの違いについて
- リーディングレベルに応じた本を選ぶ方法
- 興味のあるジャンルの本を選ぶ方法
- 読書記録手帳の使い方
- リーディングスピードについて

- 無理せず楽しく読む方法
- やさしい本のシリーズ紹介
- 英語のまま理解するという事
- 多読で語彙力が伸びる理由
- 読み方（黙読・聞き読み・音読）について
- 要約（Summary）を読む学習法
- 読書感想（Review）を読む・書く学習法

#### (3) 読後コメントの共有・ふり返り

学生には週ごとに授業外で読んだ図書の中から1冊を選んで簡単な感想とおすすめ度評価（5段階）を課題（ブックレポート）として提出させ、授業でその情報を共有した。また、ふり返り活動として前回の授業の受講確認のコメントからよいものがあれば紹介し、同僚の学習体験を共有することによって学習意欲がかき立てられることを狙った。

#### (4) 多読・多聴学習活動

授業内での学習活動は、授業外で学習者が自分でも行うことができるように、ネット上の多様なリソースを活用しながら以下のような活動を行った。

- 映画俳優による絵本の読み聞かせ視聴<sup>15)</sup>
- オバマ前大統領夫妻による絵本の読み聞かせ視聴<sup>16)</sup>
- 英語圏の幼稚園の先生による絵本の語り聞かせ視聴<sup>17)</sup>
- Xreading から選抜した図書の聴き読み
- 読書感想の英作文
- 話の続きを作る英作文
- Quizlet による語彙学習<sup>17)</sup>

#### (5) 受講確認

受講確認は出欠を確認するために毎授業の終わりに行った簡単なアンケートで、「今日学んだことをまとめなさい」と「質問があれば記入してください」の2項目からなっている。学生はこれを Moodle から提出し、結果は CSV 形式でダウンロードできるのでエクセルで整理して、次の授業でふり返り活動の際に使うようにした。

以上のルーチンとは別に、授業時間を丸ごとかけて行った活動として、英語ビブリオバトル大会とアセスメントテストがある。

#### (6) 英語ビブリオバトル大会

ビブリオバトルは昨今全国的に広がりを見せる知的書評合戦であり、以下が公式ルールとなっている。

1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
2. 順番に1人5分間で本を紹介する。



3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。
4. 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。

(ビブリオバトル公式ウェブサイト)<sup>18)</sup>

本授業ではグループ活動として、これを英語で行った。一応公式ルールに従ったが、グループ発表なので各自の発表時間は1分程度(ただし英語)である。紹介図書のジャケットを Google Meet で画面共有して5分発表の後、口頭もしくはチャット機能を用いて質疑応答を3分間行った。この活動は授業期間の前半で1度行ったところ好評であったので、学期後半にもう1度行うことになった。

(7) アセスメントテスト

アセスメントテストとしては、Pearson 社のプログレステスト<sup>19)</sup>を使用した。プログレステストを採用した理由は、診断スケールが英語能力のグローバル指標である CEFR (後述) に対応しており、英語能力(4技能+文法力+語彙力)を総合的に診断できるためである。またプログレステストは項目応答方式と呼ばれる方式を採用しており、学習者の正答・誤答に応じて次に出題される問題の難易度が調整される設計になっているため、学習者の能力に応じてかなり柔軟にきめ細かな診断ができるという利点もある。テストはオンラインで受けることができ、以下の構成となっている。

【セクション1】語彙・リーディング

- ① 穴埋め問題
- ② 選択問題
- ③ 読解問題

【セクション2】リスニング・スピーキング

- ① 音読問題
- ② 書き取り問題
- ③ 復唱問題
- ④ 描写問題
- ⑤ 聞き取り問題

【セクション3】ライティング

- ① 要約問題
- ② 描写問題

テスト時間は約60分。結果はAIが判定して受験後即座に見ることができる。本研究授業は科研費(JP20K00906)の補助を受けており、多読学習の効

果を測定するための pre/post test としてこのテストを利用することにした。

4.5 評価

授業の目的にかんがみ、評価は形成的評価を主体として読書量(60%)授業内活動(40%)の割合で行った。つまり目標の5万語を達成すれば少なくとも単位は取得できることになる。プログレステストについては評価対象に含めなかった。

5. 結果と考察

5.1 学習成果

(1) 読書量

最終的に受講者35名中29名(83%)が目標の5万語を達成した(最高は65,763語)。読んだ本の平均冊数はひとり平均36.9冊、うち理解度確認クイズに合格した本は29.0冊であった。注目すべき点は、TOEIC100点台の学生でも目標達成ができたことである。これは多読教育が多様なレベルの学生が混在するクラスでも、柔軟に対応することができる可能性があることを示唆している。ただ同時に読んだ本の平均リーディングレベル(Level2からLevel9)や読んだ本の冊数(合格した本:1冊~154冊)にはかなり個人差があった。当初の英語力や読書性向と学習効果の関係については、今後の課題として別途調査していきたい。

月ごとの平均読書量を見ると、最終月が最も多くなっており、駆け込みになったケースがあることを示している(図-1)。

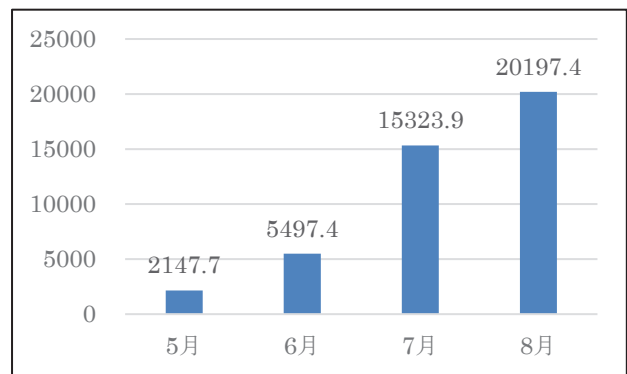


図-1 月ごとの平均読書量(語数)

また、目標達成に至らなかった6名の平均読書量は通算4,172語で目標の10%にも達していない。これらの学生については読書量がゼロの月も散見さ

れ、そもそも読書習慣が身につけていないことが考えられる。このような学生をいかに指導していくかが課題である。

### (2) リーディングスピード

一般に英語母語話者が黙読する際のリーディングスピードは1分間に200語～300語といわれている。また Xreading の音声教材は1分間に150～160語のスピードで読まれている。速く読むこと自体を目的にする必要はないが、読書を楽しむためにはある程度のスピードが必要であることも確かである。

本授業では前半(3回目)と後半(12回目)で学生のリーディングスピードを測定した。測定方法は英語母語話者児童向け絵本(Oxford Reading Tree, Level 8, 6-7歳児対象)<sup>20)</sup>のテキストを表示して、1分間黙読して読めたところまでの語数(wpm)を報告してもらった。結果は測定1回目の平均が91.0語、2回目の平均が107.6語で約18%伸びたことになる(表—1)。

表—1 リーディングスピード

wpm	測定1回目 (n=27)	測定2回目 (n=24)
M	91.0	107.6
SD	33.3	32.0
最高値	168	191
最低値	15	51

ただ、個人間のばらつきは大きく、伸び率も最大が240%(15語→51語)、最低はマイナス40%(129語→77語)となっている。

また、Xreading の統計では、リーディングスピードのクラス平均は125.9 wpmであったが、中には300 wpmを超える学生が2名いた(うち1名は不合格)。これらの学生は流し読みをした可能性が高い。今後はクラスの課題設定でリーディングスピードの上限を200語～300語程度に設定しておくことが望ましいと思われる。

### (3) リーディングレベル

リーディングレベルはプレイスメントテストを受けた30名の内、目標を達成した24名は全員Level 1からLevel 4に上がった。目標未達の6名については3名がLevel 1のまま、あとの3名はLevel 2にとどまった。

Xreading のリーディングレベル表(14段階)<sup>12)</sup>によれば、Level 1(見出し語51-100語)は初心者レベ

ル、Level 4(見出し語300-400語)は初級レベルとなっている。50,000語を読んでやっと緒についたというところであろう。今後も多読を継続していくことが望まれる。

### (4) 理解度確認クイズ

理解度確認クイズの一人当たりの受験回数は35回、うち合格した平均回数が29.8回で、平均合格率は約85%であった。

## 5.2 学生の反応(授業アンケート結果)

### (1) 多読をやった良かったですか?

27件の回答のうち、「はい」が25件(92.6%)、「どちらともいえない」が2件(7.4%)であった。

「はい」と答えた理由については、以下のような記述があった。

- 少し英語が読めるようになった
- 英語に触れる機会が増えた
- 英語に対する興味がわいた
- 目標設定をし、努力するきっかけになった
- 興味に合った内容で英語を学べる
- 英語の基礎力を身につけることができた
- 苦手意識が薄まった
- 単語力や読解力がついた
- 英語の本はあまり読む機会がないのでよかった
- 英語に慣れた
- 面白かった

### (2) 多読のモチベーションアップにつながったと思う活動をチェックしてください(複数回答可)

授業内活動を得票順に並べると以下ようになる(表—2)。

表—2 モチベーションが向上した授業内活動

順位	授業内活動	得票数
1	英語ビブリオバトル大会	13
2	授業内多読	12
3	多読・多聴学習活動	9
4	多読ガイダンス	7
5	読書コメントの共有	6

### (3) 多読・多聴学習活動の中でとくに英語の力がつくと思った活動をチェックしてください(複数回答可)

多読・多聴学習活動の中でとくに学習効果があったと学生が感じた活動を得票順に並べると以下ようになる(表—3)。

表—3 効果を感じた学習活動

順位	多読・多聴学習活動	得票数
1	オバマ大統領夫妻による絵本の読み聞かせ視聴	8
2	Quizletによる語彙学習	7
3	読書感想の英作文	5
4	映画俳優による絵本の読み聞かせ視聴	4
4	Xreadingから選抜した図書の聴き読み	4
5	英語圏の幼稚園の先生による絵本の語り聞かせ視聴	3

残念ながら「話の続きを作る英作文」についてはアンケート質問から漏れていたため集計できなかった。

(4) その他

上記のほか授業全体についてのコメントとして以下のようなものがあつた。

- 苦手な英語がそんなに嫌だと思わなくなった
- 英語がより身近なものになった
- ビブリオバトルが楽しかった
- 5万語というのは少し多い
- 最初は5万語という目標に到達できるか心配だったが、読書の面白さに気づき、達成まで繋げることができた。今までの英語科目で一番力が身についたと感じている。
- わかりやすく楽しかった
- リスニングとライティングが苦手ということがわかった
- 多読をすることで英語の力がついていくのを実感することができた
- 色々な取り組みができてよい経験になった

5.3 プログレステスト

5.3.1 診断基準

プログレステストの結果について述べる前に、ここではまずその診断の基準についてまとめておく。プログレステストは Pearson 社が開発した GSE (Global Scale of English) の尺度 (10-80) に基づいて学習者の英語習熟度を診断するテストで、およその CEFR (Common European Framework) <sup>21)</sup> との対応は以下のようになっている (表—4)。

表—4 GSE と CEFR

GSE	CEFR
85-90	C2
76-84	C1
59-75	B2
43-58	B1
30-42	A2
22-29	A1
10-21	<A1

また CEFR における各指標別の記述は以下のとおりである。

【熟練した言語使用者】

(C2) 聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。

(C1) いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。

【自律した言語使用者】

(B2) 自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。

(B1) 仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。

【基礎段階の言語使用者】

(A2) ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地域の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。

(A1) 具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

(文部科学省ホームページ) 22)

### 5.3.2 結果

テストは段階別に6種類(Progress 15-30/25-40/35-50/45-60/55-70/65-80)あり、pre testでは35名全員がProgress 15-30を受験したが、post testではpre testで30点以上得点した5名はProgress 35-50を、それ以外はpre testと同じProgress 15-30を受けた。ただしpost testを受験しなかったものが6名いるので、比較対象としたのはpre/postともに受験した29名である。表—5は項目平均点の比較およびt検定の結果をまとめたものである(Progress 15-30の<10は9点、>35は36点に換算/Progress 35-50の<30は29点に換算)。

表—5 Progress Test

総合点	M	SD	t(28)	r
pre	20.4	9.53	0.72	.13
post	19.9	9.15	n.s.	

総合点の平均点はpostテストがpreテストを僅かに下回る結果となったが、統計的な有意差はみられなかった。項目別の平均値についてもほとんど変化はなく、文法で若干の効果量( $r=.22$ )が認められた程度である(平均点:20.1→21.7)。おそらく5万語程度のインプットでは、英語能力の質的変化をもたらすには不十分ということであろう。

次はCEFR指標に対応する人数の内訳であるが、これも前後でほとんど変わらなかった。

表—6 CEFR 指標別人数内訳

CEFR	pre	post
A2	5	5
A1	9	8
<A1	15	16

5.3.1に記したCEFR指標の内容からも分かるとお

り、仕事で使えるようになるためには、少なくともB1レベルの力が必要である。今回2年次生以上を対象とするクラスで、学生の英語能力がA1以下からA2までのレベルにとどまっていることが示されたが、3、4年次も引き続いて英語の学習を継続していくことが重要であるといえる。

## 6. むすび

本稿では、オンライン多読システムを利用した授業の概要と効果について述べた。授業アンケートの結果から、学生の満足度は高く、英語を教科書で学ぶのではなく、自分が選んだ本を読むという、実際に英語を使う活動を通して、英語を面白いと感じ、モチベーションの向上につながっていることが示唆された。多読は学生が自ら行うものであり、授業内活動では学習そのものよりも、いかに学生の意欲を喚起し、授業外でも自ら進んで読み進めていくように仕向けるかが成功の鍵となる。したがって教師の役割は「教える(teaching)」ことより「促進する(facilitating)」ことが中心になる。授業では大半の学生が目標の5万語を達成したが、pre/post testの比較では統計的有意差はみられず、英語力の質的変化をもたらすにはまだ不十分であることが分かった。日本人英語学習者のインプット量は圧倒的に不足しており、もっと多く英語に触れる機会を増やしていく必要がある。また学生の英語力はCEFR指標でA1以下からA2の範囲にとどまっており、3年次以降も引き続き英語の学習を継続することの重要性が示唆された。

なお、本教育実践を研究につなげるためには、さらなるデータの蓄積とより精緻な分析が必要である。本研究プロジェクトはJSPS科学研究費JP20K00906の補助を受けており、今後5年間引き続いて授業観察を行うとともに、摂南大学、神戸学院大学と共同で、多読を長期継続した場合の効果についても検証していく予定である。また、本稿の執筆に際しては、研究分担者の松田早恵先生(摂南大学)から貴重な意見を頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

## 参考文献

- 1) 高瀬敦子『英語多読・多聴指導マニュアル』, 大修館書店, 2010, pp.13-16.
- 2) 長谷川修治・中條清美・西垣知佳子「中・高英



- 話検定教科書語彙の実用性の検証」, 日本大学生産工学部研究報告 B, 第 41 巻 2 号, 2018, 49~56 頁.
- 3) J.K. Rowling, *Harry Potter and the Philosopher's Stone*, Bloomsbury, 1997.
- 4) S.D. Krashen, *The Input Hypothesis*, Longman, 1982, p.2.
- 5) 青空文庫  
<https://www.aozora.gr.jp/>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 13 日)
- 6) Project Gutenberg  
<http://www.gutenberg.org/>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 13 日)
- 7) Oxford OWL  
<https://www.oxfordowl.co.uk/>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 13 日)
- 8) Extensive Reading Central  
<https://www.er-central.com/>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 13 日)
- 9) Oxford Reading Club  
<https://www.oxfordreadingclub.jp/>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 13 日)
- 10) eSTATION 多読の森  
<https://e-st.cosmopier.com/er/>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 13 日)
- 11) Literacy Pro Library  
<https://emea.scholastic.com/en/literacy-pro-library>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 13 日)
- 12) Xreading  
<https://xreading.com/login/index.php>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 13 日)
- 13) Day, R. R., & Bamford, J. *Extensive reading activities for teaching language*, Cambridge University Press, 2014.
- 14) 高瀬 (2010), 92~127 頁.
- 15) Storyline Online  
<https://www.storylineonline.net/>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 14 日)
- 16) Storytime with President and Mrs. Obama  
<https://www.youtube.com/watch?v=U-hTKWCX7hc>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 14 日)
- 17) Quizlet  
<https://quizlet.com/>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 14 日)
- 18) ビブリオバトル公式ウェブサイト  
<http://www.bibliobattle.jp/>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 14 日)
- 19) Pearson  
[https://www.pearson.co.jp/products\\_services/assessment/progress/](https://www.pearson.co.jp/products_services/assessment/progress/)  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 14 日)
- 20) Oxford University Press  
<https://www.oupjapan.co.jp/ja/gradedreaders/ort/index.shtml>  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 15 日)
- 21) 各資格・検定試験と CEFR との対照表  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/30/03/\\_ics\\_files/afieldfile/2019/01/15/1402610\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/_ics_files/afieldfile/2019/01/15/1402610_1.pdf)  
 (閲覧日: 2020 年 9 月 15 日)